

びじゅつって、すげえ！ 2022-2023 Vol.2

いろいろなところに、美術がいっぱい。



大分県立美術館教育普及室
<https://www.opam.jp>
<https://www.facebook.com/OPAMeducation>





ビジュツガ



びじゅつって、すげえ! 2022-2023 Vol.2

いろんなところに、美術がいっぱい。

| 目次 |

- 3 他分野・多分野のワークショップ・レクチャー
- 5 OPAM美術部
 - 6 素材との出会い
 - 7 アーティストとの出会い
 - 10 教育普及活動展示 OPAM美術部の活動から
- 11 スケッチ&ドローイング
 - 生物画の魅力 ~川島逸郎の標本画ワールド
 - 13 あるとき、出てきます ~変形菌の魅力
 - 15 探して描く、変形菌
- 17 未知っち、見ちっち vol. III 見立ての世界
 - 其の一 風景とそのむこう側
 - 19 其の二 見えると見る ~米を占う菌類たち
 - 21 其の三 銅鐸・その祈りと造形
 - 23 其の四 茶室とその精神
 - 25 其の五 現代美術が細工見世物、美術展が開帳だったころの話
- 27 What's Museum? III 糸・布・衣
 - 28 祇園祭のタペストリー
 - 29 大分の仏像・六郷満山を中心に
 - 30 衣文からみる仏像彫刻/仏像コスプレ 着付けをしてみる
 - 31 関連ワークショップ&レクチャー
- 33 実施一覧



他分野・多分野の ワークショップ・レクチャー

大分県立美術館
学芸企画課 教育普及室 室長 榎本寿紀

遊びとしての美術

開館からはや8年。アトリエ・体験学習室で行う講座や、地域に出向くアウトリーチは、年間300回ほど実施している。対象者や時間、内容を変えてさまざまな企画を行っており、他分野・多分野にわたるワークショップ・レクチャーとなっている。これは昨今流行りのSTEAM教育を取り入れているわけではなく、また学びのため・知的好奇心触発のための美術館として企画しているわけでもない。美術とは何か、美術館とはどんなところなのかを考え、遊びとしての美術、そしてさまざまなモノ・コトとの出会いを実践していくと、自然と分野横断型の講座を多く実施していた。

教材ボックスから始まるワークショップ&レクチャー

身の回りから好奇心を触発するため、大分県内の自然や文化などから制作した教材ボックス。それを活用して、地域資源から絵の具のもとである顔料をつくるワークショップを、数多く開催してきた。こうした教材ボックスから「見るワークショップ」や「聴くワークショップ」が始まったことについては1巻で触れた(Vol.1 p.5)。教材ボックスの制作に化学と科学は必要不可欠だ。美術館スタッフで実践しながら制作を進めているが、ときには公開ラボラトリーという形で来館者にも協力を得て、その成果は講座でお披露目する。場合によっては絵画組成の研究者や地学、工学、植物、博物学の研究者をはじめ、その道のスペシャリストのワークショップ・レクチャーに結びつく。こうして数多くのワークショップ・レクチャーが始まった。

特別ワークショップ・レクチャー ～他分野による美術と美術館の可能性

開館から5年間は、「○○をめぐる7つのお話」と題した連続レクチャーを開催してきた(○○は、教材ボックス/2015、みる/2016、植物/2017、色/2018、美術館/2019)。その後、未知との出会いを求め、アーティストと科学者の対談形式で行う「未知っち、見ちっち」(2020・2021)、歴史的・民俗的資料を美術的視点で見る、あるいは科学的視点も取り混ぜる「What's Museum?」(2020・2021)、アーティストの手業や手の機能に注目した「手が語る」(2019・2020・2021)、「身体のワークショップ」(2015)、「音楽と美術のワークショップ」(2016・2020・2021)などを開催している。

ではここで、招聘講師をあげてみたい。美術家、画家、彫刻家、デザイナー、舞踏家、ダンサー、写真家、工芸作家、染色家、修復家、絵画組成・技法材料研究家、キュレーター、文化財研究者、保存科学研究者、民俗研究者。そして理学博士、工学博士、薬学博士、博物学者、歴史学者、美術館館長、大学教授・名誉教授と、分野は美術とは限らない。中でも国立科学博物館から迎えた研究者の専門は、鉱物学、分子人類学、天文学・宇宙科学、結晶学、菌学、高山植物・環境適応学、生物有機化学・園芸学、材料工学、古脊椎動物学、火山学・岩石学、形態人類学・法医学人類学と、多岐にわたる。変わったところでは、左官職人、獣医師、アナウンサー、数学者、ミュージシャン、作業療法士だろうか。

科学や歴史、文化、哲学、宗教、文学は、それぞれ独立した分野である。分野横断型の教育は、学校教育の世界ではSTEAM教育としてその必要性が謳われているようだ。しかしアーティストの視点に立つと、作品制作において、表現内容に伴う哲学や技術、素材についての知識は必要不可欠である。だからアートの世界に触れようと思えば、必然的に他分野・多分野が関係してくる。

出合いを求めて

美術館にはさまざまな出会いが待っている。しかし初めから、美術館に行ってもつまらない、私は美術とは無関係だと思込んでいる人も少なくない。そこでモノヤコトとの出会いのきっかけをつくりたい。さまざまな分野との出会いは、より想像力をかき立てる。分野を横断し、身の回りの事象・現象や、さまざまな領域を美術的視点で見ると、楽しさが倍増する。視点が融合されると、そこには新たな可能性が生まれるだろう。モノとの出会い、コトとの出会い、ヒトとの出会い。当館の教育普及活動が、その些細なきっかけになればよいと思う。

2022年度の活動から

今年度もさまざまな他分野・多分野の特別ワークショップ・レクチャーを行うことができた。自然を見る・観る・見る講座「スケッチ&ドローイング」では、標本観察とフィールドワークを通して、実物を身体で感じ、観察しながら描いた。講師には生物標本画の川島逸郎氏と変形菌研究者の矢島由佳氏を迎えた。ただし自然観察は対象物に合う時期に行うことが重要で、生物が対象の場合は初夏から夏が望ましいが、今回はやむを得ない事情で11月に開催。また描写には専門的なトレーニングが必要で、今年度はそのための導入のような観察と描写の講座を行った(p.11-16)。次年度以降も継続し、次回はぜひ初夏に開催したい。

3回目を迎える「未知っち、見ちっち」は、科学的視点と美術的視点による対談から新たな視点を得ることを目指して始まった。今年度は身のまわりのモノ・コトを、別の何かになぞらえて表現する「見立て」がテーマ。美術、科学、歴史、文化の見立ての世界をのぞくと、妻木良三氏(美術家)、細矢剛氏(菌学)、井上洋一氏(考古学)、遠山典男氏(茶室建築)、木下直之氏(博物学・美術史)を講師

に迎え、5回連続で行った(p.17-26)。

歴史的・民俗的資料を美術的視点で見る「What's Museum?」も3回目となる。副題を「糸・布・衣」とし、日田祇園の見送幕、そして仏像の衣文に注目したワークショップと展示、レクチャーを開催した。講師には吉田雅子氏(染織史)、菅野剛宏氏(民俗学)、岩井共二氏(仏教美術)を迎えた(p.27-32)。

他にもOPAM美術部の中でアーティストと出会うワークショップ・レクチャーとして、高橋賢悟氏(美術家)、市川平氏(特殊照明家)、谷本めい氏(美術家)に(p.7-9)、先生のためのワークショップでは佐野藍氏(彫刻家)に(Vol.1 p.34)、アウトリーチの活動では新宅加奈子氏(美術家)と、前出の谷本氏、佐野氏に来ていただいた(Vol.1 p.28-30)。

こうした多彩な講師との出会いから、いわゆる美術の分野だけにとまらない広い分野の驚きと出会う楽しさが生まれ、それがひいては美術を楽しむことにつながっていくことだろう。当館教育普及の目的の一つは、作品鑑賞のため、「自身の視点を獲得する」ことである。「他分野・多分野のワークショップ・レクチャー」が、独自の視点でモノを見る、作品をよく見ることに繋がると期待している。

※この原稿は2022年9月、全科協ニュース vol.52 no.5の特集「博物館における自然科学と異分野の融合」(全国科学博物館協議会)に掲載されたものに、大幅に加筆・修正を行ったものである。



OPAM 美術部

美術館は、美術に出会える場所であり、知的好奇心や感覚を触発する場所である。より多くの人に、美術に親しんでほしい、自分にとっての美術を見つけてほしい。そう思っているOPAM教育普及に、「学校で美術に接する機会が少ない」「専門領域に触れる機会が少ない」という声が聞こえた。それではと、県内の中学生・高校生を対象にOPAM美術部が始まった。2年目となる今年度は、昨年からの継続部員7名に新入部員を加え、21名で活動を開始する。月1~2回ほどの活動日に加え、番外編の自主制作日を設けたところ、コツコツと通う部員もいた。年末年始には、それらの成果を美術館アトリエで展示した。また、普段出会うことのないアーティストとの出会いの機会を設けたところ、多くの刺激を得た。このOPAM美術部によって、中学生・高校生ならではの感性がさらに活性化してほしい。

紙漉き

和紙と紙漉きについて、材料である楮(こうそ)・三椏(みつまた)・雁皮(がんび)を見ながら解説。あわせて書道半紙を揉み紙にして、質感や表情の変化を体感した。その後、クッキー型や色紙を使って模様をつけながら、紙を漉いた。紙漉きの工程ではモノを封じ込めることもできる。各自、カエデの葉や星の砂、貝殻などを持ち寄って、紙の中に漉き込んだ。

素材との出会い

今年度のテーマは「素材と技術」。感覚を刺激しながら素材との対話を楽しみ、発想を広げていきたい。

まずは身近な素材として紙を、あまり触ることのない素材として石膏を取り上げた。

ともに制作の過程で水が関係し、素材が変化・変容する。早々と制作を終えた部員は、次に木や金属での制作にチャレンジする。

木の場合は切る・削る、金属では叩くという、道具とアクションを伴う。

素材と出会い、技術をもって加工する体験により、モノを見る眼も広がっていく。

粘土を作る・粘土で作る

陶土の塊を金槌で碎き、ふるいにかけてサラサラにする。粉状になったら、水を混ぜて練る。サラサラの粉がべっとりとなり、手から離れないのは気持ち悪いが、徐々に硬さが変化していき、触感が変わる。昔、泥んこ遊びをしたことを思い出した部員もいた。



木

スギの木を万力で固定。ノコギリ、ノミ、彫刻刀、小刀で形を作る。作りたいものが複雑すぎた部員は、卓上糸のこ盤を使った。木目や質感よりも、彩色にこだわった部員もいた。

金属



金属板(錫)を叩いて絞って、器を作る。平らな板が立体に変わっていくのは不思議だが面白い。集中力が冴え渡る。可愛い器が短時間でできあがって大満足だった。

石膏

粘土で原型を作り、石膏型取りを行う。はじめにスプーンを叩いて石膏ペラを作る。そして水に石膏を1:1の割合で入れ、空気が入らないようにヘラでゆっくりかき混ぜる。クリーム状を経てカチカチに硬化するまで約20分。石膏の塊は石のようだが、薄いとバリバリ割れる。その表情を楽しみながら、粘土からの型取りを行った。複雑な形を石膏型取りするのは難しいため、塑像(粘土だけの制作)で完成させる部員や、石膏の塊を彫刻する部員もいた。



アーティストとの出会い

今まで会ったことのない人と出会うことで、さらなる知的好奇心を触発し、豊かな心を創造するために、「アーティストとの出会い」と題するワークショップをOPAM美術部でも行った(アウトリーチでの「アーティストとの出会い」はVol.1 p28-30)。今年度のテーマに合わせ、素材と技術を独自の感性で表現している3名のアーティストを招聘した。貴重な機会であるため、通常の活動(2時間)を3時間に拡大し、美術部以外の一般の参加者も交えて行った。

講師:高橋賢悟(美術家)

高橋氏は、金属を溶かし、型に流して形を作る鋳造・鋳金を行っている。生と死、あるいは再生をテーマに制作した作品は、真空加圧鋳造法という技術を用いた新しい金属彫刻である。作品の素材と制作方法、作家がテーマとする死生観について話を聞いたあと、参加者全員に質問を書いてもらい、お便りを読みながら進めるラジオ番組のように、答えていく。さらに、鋳造におけるロストワックス法の実演を間近で見ると、作家の制作と人柄に触れた3時間だった。



高橋賢悟です



金属との出会い



生の造形

東京藝術大学の卒業制作で、東京のエネルギーや社会を、動物に例えて制作した。その後、明治から昭和にかけて活躍した鋳金工芸家・津田信夫を知り、表現するためにはもっと伝統工芸の技法を学ばないといけないと思った。

死の造形

東北大地震の被災地で展示を行ったときに感謝され、人に支えられていることを実感した。そのことをきっかけに、アートの意味について深く考え、社会と関わりを持つ発表をしようと思った。人の死について、命について、考えようとしたとき、ネアンデルタール人が吊るのために花を供えたことを知る。これを人間らしさの原点とらえ、ネアンデルタール人の骸骨を忘れた草で覆うことを現物鋳造法で制作した。

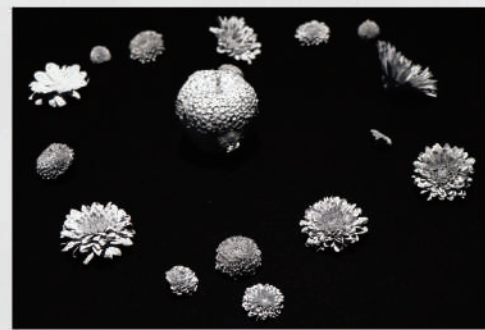
祈りの造形

震災現場を訪れたとき、思わず手を合わせて祈った。何に対して祈ったのか、よくわからない。神秘的な造形を探り、自然崇拝や原始宗教について考えると、祈ることが生きるために必要な行為だということに気がついた。生きるきっかけをテーマにして作品を作ることにした。



命の転写

花という、はかないものが金属になる。転生と再生を繰り返し、さらに強い生命へと生まれ変わる。技術にもコンセプトが必要だという高橋氏は、この制作を「命の転写」と言っている。表現と技術の一致を行う高橋氏。作るのが好きだから作品を制作する先にある、作家の真髄と出会う機会となった。



石膏型にワックスでできた忘れな草の花を置き、型に沿って花を溶かしてつなげていく。2~5mmの花が約32種類。繊細かつ膨大な時間を要する作業だ。



高橋賢悟

1982年、鹿児島県生まれ。東京藝術大学大学院 美術研究科修士課程 鋳金研究室を修了後、同研究室の教育研究助手を経て非常勤講師へ。2022年春、東京藝術大学大学院 美術研究科 博士後期課程 工芸研究領域(鋳金)修了。「東京藝術大学博士審査展」(東京藝術大学大学美術館、東京)では野村美術賞を受賞する。東京藝術大学大学美術館で鈴木長吉の作品「十二の鷹」を見たのをきっかけに、同校の工芸科を目指し鋳金を学ぶ。現代における「死生観」と「再生」をテーマに制作に取り組み、「ロストワックス法」という鋳造技術を使った超極薄のアルミニウムによるオリジナルの技法を編み出して先人に挑戦している。

光との出会い

講師:市川平(特殊照明家)



彫刻家から特殊照明家へと肩書を変えた市川平氏。そのスケールの大きさや光と影を使ったパフォーマンスは、通常の美術の枠におさまりきらない活動だ。作品についての考え方や、過去から現在までの作品解説を聞いたあと、光を使ったパフォーマンスを参加者とともにいった。

大の映画好きだから物語を

彫刻家を名乗っていた時代から、光ありきで作品を制作していた。その源泉は、子どもの頃に見たプラネタリウムの投影機と、大の映画好きということ。1988年に「ドームのないプラネタリウム」を制作、それ以降は現代的なモチーフを選び、彫刻でありながらさまざまな素材・要素を取り入れ、SF的な物語性を感じさせる作品群を作り続けている。

何でもできることに気がついた

彫刻作品の内部を光らせ、自作のミニチュア電車に光源を乗せて走らせる中で、影がどんどん変化の様から移動光源の面白さに気がついた。自作の移動光源装置を用い、自身が制作した造形作品や、他の作家の作品、周辺の建造物を照らすことで、見たこともないような動きをする光と影の表情をつくり、造形作品や空間の新たな魅力を引き出すことに心血を注いだ。

SNSで発信

映像に残したい。パフォーマンス化することも考えた。そう考えたら、即興で何でもできる。竿の先に水銀灯を付けて照らすのが火の玉シリーズ。ゲリラ的に友達の作品に移動照明を当てたり、建築に当てたりする。ダンサーなど、面白ければ誰でもコラボしたくなる。チャンスがあれば、すぐに行く。リヤカーに光源を内蔵したオブジェを乗せて自転車で引っ張るリヤカーアート、フィギュアに照明を当ててその影を楽しむシリーズなど、照明の可能性を証明したい、開拓したいと強く思っている。こうした活動は、FacebookやTik Tokで常に発信している。



この部屋を照らす~ 照らしたら面白い形を見つけよう

部屋を暗くして、市川氏の制作した照明装置で照らす。緑の光が点滅しながら、向き合った球体と照明が回転し、影が大小に変化して部屋中を回る。市川氏が火の玉のような水銀灯を揺らして歩く。

部員は

市川氏に照明装置のON/OFFを教えてもらい、キーボードをたたくと点滅する光や、音を出すと光るフラッシュに嬉々として手を動かした。

光源が

移動すると影の形や大きさが変化する仕組みがわかったら、アトリエや準備室から、影の形が変化すると面白そうなものを探して設置。壁や布に、新たな影がどんどん生まれた。全員が興奮の渦に巻き込まれる。光と影を素材として、時間と場所を作ることも美術活動の一つであることに、新たな感動を覚えた部員たちだった。

市川平

1965年、東京都生まれ。1991年、武蔵野美術大学大学院修了。第2回キリンコンテンポラリーアワード受賞。1993年、第3回ジャパンアーツカラシッパ受賞。2015年より肩書を彫刻家から特殊照明家に変更。2021年には富山県入善町の「下山芸術の森 発電所美術館」にて、彫刻家時代(1988~2015年)のデビュー作や未完の大作と、特殊照明作家時代(2015年~現在)の最新照明装置とのセルフコラボ、そして発電設備が通る美術館空間とのコラボレーションとして、大規模な光のインスタレーション作品を展開した。

石との出会い

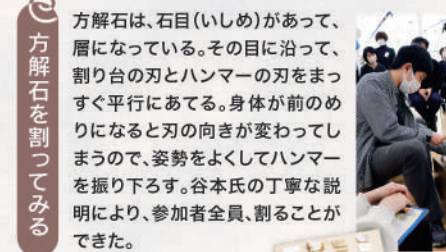
講師：谷本めい（美術家）

谷本氏は彫刻には不向きといわれている方解石を使って、作品を制作している。触る教材[Hands on Works]でも、彫刻には不向きな大分県内の石から作品を作った谷本氏に、制作への想いとその経緯を聞く。また実際に方解石を割る体験も行った。



はじめに作品を視る、触る

山口県美祿(みね)市の石から作られた《アンモナイトの化石I》《アンモナイトの群》、世界の大理石などから作られた《植物化石標本》、大分県内の石から作られた《海の生き物たち》を、視る・触る。まるで本物の化石のように、質感もすべすべしていたり、ぼろぼろしていたり、すべての石が異なる。見た目と実際の重さの違いにも驚いた。



方解石を割ってみる

方解石は、石目(いしめ)があって、層になっている。その目に沿って、割り台の刃とハンマーの刃をまっすぐ平行にあてる。身体が前のめりになると刃の向きが変わってしまうので、姿勢をよくしてハンマーを振り下ろす。谷本氏の丁寧な説明により、参加者全員、割ることができた。

アーティストトーク「石の世界へ」

大学に入った時は油絵科で、もともと彫刻専攻ではなかった谷本氏。少しづつ石の世界にのめり込んだという。谷本氏の美術家としての歴史を、作品をさかのぼりながら、みていった。

石灰岩は化石そのもの。その中でも結晶化している方解石は、劈開(へきかい)するため彫刻には不向きといわれている(劈開とは、結晶や石が割れるときに、特定の方向に割れやすい性質のこと)。どんな石でも彫れない石はないから、いいなと思った石は、触りながら向き合うことが何よりも大切。だから制作するときは、まず石の性格を知ることから始めるという谷本氏。方解石が採れる美祿市は化石の町として有名なので、その象徴としてアンモナイトを彫ることになった。

インスタレーションでは、人は石に沿って歩くので、石の配置によって人の動きも変わる。風が吹くと木の葉が渦巻き、自然環境の変化とともに作品も変化する。こうして生まれる変化は、人が作品を見て、気がつくこと。現代の暮らしは、技術の発達とともにデジタル化が進み、どこでも会話できるし、写真の画質も高い。でも、それでは本質をつかめない。本能的な感覚が大切だ。だからこそ、見てくれる人が、変化する環境の中で作品を体験し、何かが発見できる作品を目指したい。



感想と質問がいろいろ

作品を視る・触る、アーティストトーク、方解石を割ってみる。それぞれが終わるごとに、参加者に感想や質問を書いてもらい、最後に、質問に答えていく。「好きな石はラピスラズリ」「制作は直感を大切に」「割れることもあるけど失敗とはとらえない」「答えるたびに、みんなうなずいた。「アーティストでありたいから無我夢中で向き合う。それが生きている実感となる」という谷本氏。まさにアートを感じる出会いとなった。



谷本めい
1991年、東京都生まれ。東京藝術大学大学院 美術研究科修士課程 絵画専攻壁画修了後、ポーラ美術振興財団在外研修員としてトルコアナドル大学へ留学する。モザイク壁画制作のため、方解石からテッセラをつくる中、石を彫る楽しみをさらに模索し、東京藝術大学大学院 美術研究科博士後期課程でモザイク画と彫刻の融合をはかり、2022年、修了。「どんな石でも彫れない石はない」と制作中。OPAM教育普及教材[Hands on Works]として、豊後大野市や日田市をはじめ、県内の石や多種多様な大理石から制作した《海の生き物たち》《アンモナイトの化石I》《アンモナイトの群》《植物化石標本》がある。



教育普及活動展示 「OPAM美術部の活動から」

美術と美術館が好きなのが、もっと増えてほしい。そのために美術館の活動を発信しようと、年に数回、ワークショップの活動記録展示を美術館アトリエで行っている。年末年始には、美術部員の活動を作品と写真で紹介した。この展示を見て興味を持った中学生・高校生には、ぜひ参加してほしい。美術館の開館以来、いつも遊びに来ている小学生の中には、来年・再来年の入部を心待ちにしている子もいるようだ。

年明け早々、J:COM大分ケーブルテレコムが、この展示会の取材に来た。集まれる部員が集合し、そのうち3名はインタビューに応じて、自作について語る。この様子は後日、J:COMチャンネル大分「ひるドキッ!おおい」と「地域発!ど・ろーかるニュース」で放映された。



収録後、双眼鏡を持って、企画展「大本山 相国寺と金閣・銀閣の名宝」を視に行く。離れて作品の印象を楽しみ、双眼鏡でディテールや描き方を楽しんだ。



特別ワークショップ スケッチ&ドローイング

見る・観る・視る、
を深めよう!

好奇心を刺激し、能動的な視線と視点を得るワークショップにより、さらに見る・観る・視る行為を深化させたい。そこで今年度は、自然科学分野の調査・研究を専門に行っている方を講師に招き、標本観察と県内の森林や里山でのフィールドワークを行う「スケッチ&ドローイング」を企画した。実物を身体で感じ、観察して描くワークショップだ。

川島逸郎の 標本画ワールド

生物画の魅力

講師：川島逸郎（生物画家）

生物画家として昆虫の標本画を描く川島逸郎氏を迎え、三部形式で行った。



第一部 | 川島逸郎の標本画

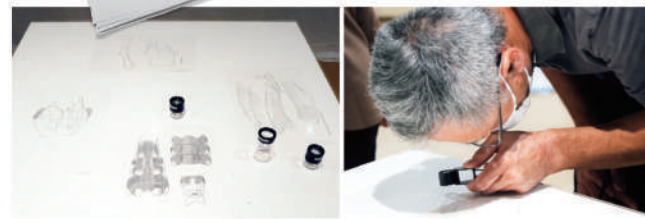
どんなものが生物標本画なのか、川島氏はどんな標本画を描いているのか、作品画像を見ながら話を聞いた。



絵画との大きな違いは、描く目的である「見る側へ、何を示し、何を伝えるための絵なのか」が明確なこと。目的に沿って、描きこむ情報の整理や抽出、省略を行うことが、もっとも重要な点だ。

休憩時には、アトリエ内に展示した川島氏の初期スケッチや原画を、ルーペを使って鑑賞した。その精密な表現に感嘆した参加者たちだった。

描くときには、写真ではわからないので本物を見ないとダメ、と言う川島氏。標本画は絵や写生とは異なり、感性では描かない。細部に至るまで科学的な根拠が大切で、正確さを追求するためにも、採集・観察・研究を一貫して行っている。



第二部 | 生物画家としての原点

川島氏の子どもの頃の話や、どうして標本画を描き始めたのか、虫・自然・標本画との出会いなどについて、インタビュー形式で進めた。



「当時の記憶の中で、『虫』のことは鮮明に覚えている。虫と出会った折々の情景とともに、今もなお、脳裏に鮮やかに刻み込まれています」

「標本画との出会いは衝撃で、それは単なる写生ではなかった。そして、ただだ、『昆虫学専門の研究室であれば、標本画の描き方を知ることができるとも、今もなお、脳裏に鮮やかに刻み込まれています』と考えると、『描くためにはまず昆虫学を学ばねばならない』と考え、昆虫学研究室のある農学系の大学へと進みました。私にとって、この見立ては的中しました」

「標本画を描くためには顕微鏡観察の前にもすべし作業がある。それは採集や標本づくり。実物の観察なくしては、描くこと自体が困難になります」

第三部 | 標本画の描き方

参加者全員でハチの写真をよく見ながら絵を描く時間も設け、具体的な標本画の描き方の話を聞いた。ミクロに迫る顕微鏡観察の楽しみ方や、昆虫の成り立ちを知るための解剖、線画や点描などの描き方、道具の話も興味深い。

顕微鏡の接眼レンズの内部に装着する「方眼メッシュ」や、顕微鏡用の「描画装置」を用いることで、絵を描けるようになった。



「方眼メッシュ」とは

方眼目盛が刻印された丸いガラスで、顕微鏡の接眼レンズの内部にはめ込んで使う。顕微鏡をのぞくと、対象物の方眼目盛が重なって見えるため、見える像を方眼紙に写し取ることで、形状やバランスを正しくスケッチすることができる。

描く道具は

製図ペンと、付けペン(丸ペン)、インク、筆、絵の具(透明水彩)だけ。ペン先は思いのほか早く摩耗していく。微細な線や点は、摩耗していない新品でしか描けないので、しょっちゅう交換する。そして点は丸くあるのが理想なので、太さ(内径)が0.1~0.3ミリのペンだけを使い続けてきた。ペン先の行き先を瞬時に見極めつつ、点は一ずつ丁寧に、そして慎重に、置くように意識して描いていく。

「描画装置」について

顕微鏡の利き腕を置く側に設置すると、紙の上に置いた鉛筆を持つ手先の像を取り込み、顕微鏡本体で観る像と重なり合って見える仕組みになっている。そのため、顕微鏡をのぞきながら、対象の像をなぞる(トレースすることによってスケッチができる。しかし使いこなすには、多くの時間がかかる。

クマゼミ (Cryptotympana facialis) 幼虫の抜け殻

眼で触るシリーズの触る・触れる教材[Hands on Works]として、川島氏に標本画の作成を依頼した。モチーフは、美術館近隣の公園で採集したクマゼミ幼虫の抜け殻。輪郭線以外はほとんど点の粗密で描かれている。この細密は、ぜひ、今後のワークショップで登場するときに見てほしい。



川島逸郎

生物画家。1969年、神奈川県川崎市生まれ。標本画や資料画を中心とした描画は独学。自然科学に裏付けられ、資料性の高い画を制作するために、自らも研究活動を行う。横浜青葉区自然史博物館研究員(1999-2000年度)、神奈川県立生命の星・地球博物館学芸員、川崎市青少年科学館(かわさき宙(そら)と緑の科学館)自然担当係長(技術職員、学芸員)を経て、川崎市社会教育委員会、青少年科学館専門部会委員、評議員、日本トンボ学会(編集委員)、日本昆虫分類学会、日本蝶類同好会、神奈川県昆虫談話会、神奈川県昆虫談話会会長の原書論文や報告記録は400編以上にのぼる。



B. 変形菌

あるとき、出てきます

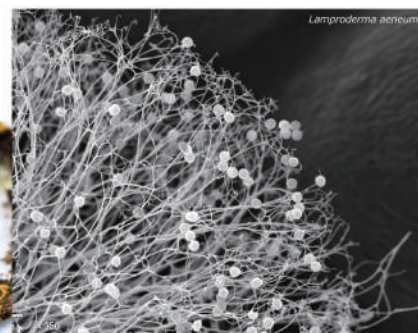
の魅力

変形菌は、別名を“粘菌”といい、森の宝石ともいわれるほど美しい。自然界でどう生きているかを研究している矢島由佳氏に、変形菌の生態や形の不思議について話を聞いた。

講師：矢島由佳（室蘭工業大学大学院 工学研究科 准教授）



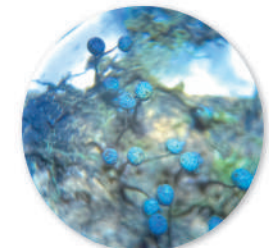
変形菌は、ライフサイクルの中で姿を大きく変える。活動する時期は変形体といい、アメーバ状である。一方、休眠するときはキノコのような形をした子実体を作り、胞子をばらまく。世界では約1000種、日本では約600種が発見されている。



細菌や菌類の捕食者である変形菌は、倒木に出てくる。「発生する」のではなく、「出てくる」。変形菌はもともとどこにでもいるもので、条件が揃うと姿を現す存在なので、「出てくる」という表現が適している、と矢島氏は言う。



初めに、矢島氏の用意した標本〈ルリホコリ〉〈ハナハチノスケホコリ〉〈ムラサキホコリ〉〈ヘビヌカホコリ〉をじっくり見る。色・形を観察しながら、決して見たつもりにならないためにも、そして今後、顕微鏡で観察するためにも、まず肉眼で見ることを大切にしたい。



宝石のような色をした〈ルリホコリ〉は、そのままでも不思議な存在だが、実体顕微鏡でのぞくと、美しさとともに神秘さが増す。実体顕微鏡は手軽に実物標本を10倍で見ることができ、その拡大された形と色にドキドキした参加者たちだった。

さらに光学顕微鏡を使い、150倍や1500倍に拡大する。矢島氏が持参した変形菌を観察したほか、前日にフィールドワークの下見で採集した子実体から、胞子と細毛体をピンセットでつまみ、プレパラート標本を作る。光学顕微鏡で見ると、丸い粒や糸、網のような形が見えた。観察とスケッチを行った。



子実体はさまざまなキノコのような形をしているにもかかわらず、その体は細胞ではなく分泌物でできているという。細胞といえるのは、中にある目に見えない胞子の中のみ。しかし何度見ても、分泌物でできているとは信じられない。

こうしたスケッチも、自分でプレパラートから作って観察すると、いっそう力が入る。参加者たちは、自身が作成したプレパラートの中に胞子を発見すると、とても嬉しそうだった。



C. 探して描く変形菌

講師: 矢島由佳
(室蘭工業大学大学院 工学研究科 准教授)

自然を見る・観る・視ることを深めるため、このコースでは、標本ではなくフィールドワークにより、変形菌を探索する。そして森林でスケッチするワークショップを行った。参加者は全員Bコース「変形菌の魅力」を受講し、標本で観察スケッチを行っている。ときおり霧雨の降る中、大分市内から1時間半ほどの森林に来た。



発見した変形菌を熱心に観察。地面に腰を落ち着け、ルーペ単眼鏡で見ながらスケッチした。〈マメホコリ〉は比較的大きいので(1cmほど)、見つけやすい。〈キララホコリ〉は雲母のような美しい石灰質を伴う。



矢島由佳
室蘭工業大学大学院工学研究科准教授。専門は変形菌(真正粘菌)、形態形成、超微細構造解析。目に見えないほど小さいことから「微生物」と呼ばれるが、目に見える微生物も地球上には存在する。この「見える微生物」を手がかりに、近年活用が期待されている難培養性微生物など未利用微生物の美体と能力の解明を行っている。国立科学博物館(3Dのニミルシル)には、変形菌特集号にて「変形菌の形づくり」を、日本土壤生物学会「土と微生物」には、根雪の下の美しい変形菌の多様性―日本の好雪性変形菌を執筆。一般的な日本産好雪性リリホコリ属の詳細が、美しい画像とともに掲載されている。



場所と季節によって、出てくるかどうかはわからない変形菌。細菌や菌類を捕食するので、倒木、しかも硬い木よりも柔らかい木の方がよさそう。しかし倒木を一見しただけではわからない。昨日の標本から考えると相当小さいはずだと、腐った木のそばにしゃがみ込む。あるいは寝っ転がってのぞき込む。



矢島氏は足取り軽く、変形菌が隠れている倒木を探して回る。見つける際のポイントなどを教えてもらいながら、倒木の下を葉っぱをかき出してはのぞいてみる。自らの身体と感覚を駆使して探す、キノコや虫のフンとの見分けに苦労する。



発見した変形菌は、想像以上に小さく驚いた。「こんなに小さくっちゃ無理!」と言いながら、一度見つけると気持ちも盛り上がる。柔らかそうな倒木を探す足取りも軽く、目星をつけた倒木の隅から隅までじっくり見た。



美術館に帰ってから、お互いのスケッチを見せあった。変形菌の面白さを感じると同時に、意外と身近な存在であることを知るワークショップになった。



他分野・多分野の ワークショップ、 決定版。

美術・文化の裾野を広げることを目的として2020年度より行ってきた「未知っち、見っち」シリーズは、科学的研究全般と美術の融合から創造される新たな視点を目指して始まった。初年度の「科学者と表現者」では、国立科学博物館の研究者と、画家やデザイナー、舞踏家など表現者との対談形式で、昨年度は「Color & Science」と題して色をテーマに、やはり国立科学博物館の研究者と美術家との対談形式の講座を行った。3回目となった今年度は、「見立ての世界」と題し、あるものを、それと似たもので示す「見立て」を取り上げる。「見立て」とは、「例えば」とは言わないけれど、喩えている。科学・歴史・文化、そして芸術のメタファーとして、さまざまな「見立て」の世界をのぞいていった。

其の一

講師：妻木良三
(美術家・浄土真宗僧侶)

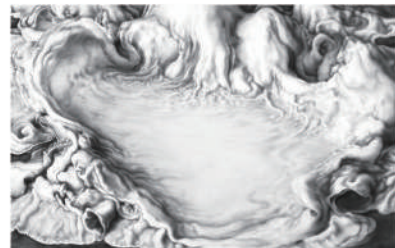
布の皺や襞をイメージの源泉とし、鉛筆で描く美術家の妻木良三氏。その作品は、須弥山をはじめとした山や風景を思わせるものから、皮膚や体内のようなものまでさまざまである。制作方法のきっかけとなる「風景を形づくる」行為について、そして美術におけるモノの視方や感じについて話を聞いた。妻木氏の作品解説の言葉を手掛かりに、妻木良三の世界をのぞいてみたい。

風景と そのむこう側



布を描いているときが、一番心地よかった。

「鉛筆で描いているのは、油絵を描いていたとき、なんだか扱いたげらんと感じ、今まで使った中で何が一番いいかと振り返ったら、鉛筆が一番心地良かった。モチーフ（描く対象物）のことを考えたら、布を描いているときが、一番心地よかった」



「布を視ながら描くのですが、描いているうちにいつの間にか布ではなくなる。床や壁も歪み始め、質感や空間が変化する感じ。しかし、目の前に布がありながら描くのは変わりません」

「使うのは紙。感覚とピタッと合う紙を探している。今はケント紙と鉛筆の相性がよいと感じている。そして全体の9割を鉛筆で描くが、墨や絵の具を使うこともある。黒が入ることによって色の幅が増えるんです」



自分が小さくなって、
絵の中を歩いているように。

妻木氏は2022年7月に和歌山県立近代美術館で、個展「はじまりの風景」を開催した。個展で展示した作品を中心に、トークは進んだ。

「海岸で拾ってきた亀の甲羅、ウニの殻などの漂着物や化石と、美術館の所蔵作品と一緒に展示しました。空間全部を使って展示しています。多くの方が、なぜ化石と美術作品と一緒に展示するのか、疑問に思うことでしょう。シダの化石は絵画的、アンモナイトは彫刻的です。そこには私にとって共通のイメージがあります。またウニの殻の粒の形には入れ子状の世界が存在し、そこに魅かれます。これは奈良の大仏が座っている花びらの中に、仏の世界が描かれているのと同じで、華厳経にある一即一切の世界です」

「頭の中だけでは作品を描けません。うねるような世界を描きたいと思い、布の皺でうねりの形を作ります。自然光の陰影ですが、それはどんどん描きながら変わっていく。周りを山として、真ん中を平地、池と見立ててみます。自分が小さくなって山水画の中を歩いているように、自分の絵の中を歩き、そこで化石を探っているイメージもあります」

絵を描き、寺の勤めも終えた夕方、
池のほとりを歩いたり、波の音を聴いたり、何かを拾ったりします。

「私のお寺は本勝寺といい、創建は400年ほど前です。普段は、絵を描き、寺の勤めも終えた夕方、池のほとりを歩いたり、波の音を聴いたり、何かを拾ったりします。お寺にすることが作品に影響しているかも知れませんが、自分ではわからない。意識はしていないけど作品に出てしまうのかも知れません。また、私の絵は山水画に似ていますが、水墨のそれとは、空間の捉え方が違うような気がします」

「絵の中の風景を盆地に見立てると、多くの人々が住むのは平らなあたりです。山のむこう側はあの世。こちら側（この世）とむこう側（あの世）との境目に、山という襞が生まれます。『境界に現れる襞』『入れ子状の世界』を大切に描いています」



「私の作品を、イメージと方法が結びついて、とおっしゃった方がいました。いつも作品ができてから、あとで俯瞰して、初めて言葉になります。描いている最中は感覚的に描いています」

「朝起きて、自分のシーツの皺を見る。それはそこにいた痕跡です。そのときの形が残る」

布の皺を作るため、キュービー人形を数体並べ、布をかぶせる。一方にはガラス瓶を並べ、その上にも布をかぶせる。下にあるモノ、そして布によって、できあがる襞は異なる。自身の感覚に合うまで何度も皺を作り出すそうだ。最新作の作品画像を真ん中に配置すると、布の皺にいかにかこだわっていたかが感じられた。



「画面を長方形から円形にしました。画面を円形にすると、むこう側をのぞいているような感覚が強まります。私にとって絵画というのは、窓のむこう側を描いているような感じ。海岸の風景のような構図は、東京から和歌山へ帰ったころの、散歩をしていた風景と重なります。すべて布を視て描いているのですが、風景に見えるという人もいれば、人間の胎内に見えるという人もいます」



妻木良三
1974年、和歌山県生まれ。武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了。1998年より鉛筆による絵画を描き始める。東京での活動の後、2008年に和歌山県湯浅町に帰郷。自坊の本勝寺で僧職を務めながら研究を重ねる。主な個展に2009年 湯浅 ライオンズクラブ（東京）、2011年 ZONE（Osaka）（和歌山）がある。また「OCW展2006」、2007年には目黒区美術館「線の間宮IIー鉛筆と黒鉛の旋律」2011年 DEEP DIG DAY PRESENTS PRISM（マキシミアンフォーラム（Miyagi））などに参加。近年は写真やコラージュといった分野にも取り組み、表現の領域を広げている。1999年武蔵野美術大学卒業制作展「雲祥」の助賞。平成28年度和歌山県文化振興奨励賞を受賞。2022年7月に和歌山県立近代美術館にて、「はじまりの風景」を開催。

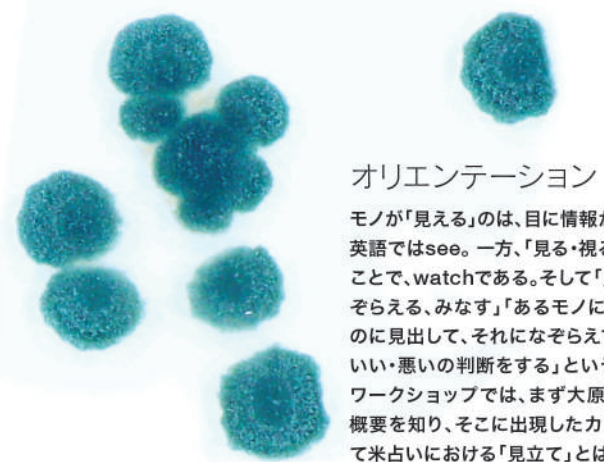


其二 米を占う菌類たち

見えると見る

講師：細矢 剛 (菌学)

大分県日田市の大原八幡宮には、「米占い」あるいは「粥占い」と呼ばれる行事がある。炊いたお米を神殿に1か月間納めて、生えるカビを見ながら毎年の農作物の吉凶を占う神事である。神殿に納められたお米に生えてくるカビ。これを科学的視点から観察した細矢剛氏に、詳しい話を聞きながら、想像力で見立てドローイング遊びを行い、科学的観察スケッチ法にもチャレンジした。



オリエンテーション

モノが「見える」のは、目に情報が入ってくることで、英語ではsee。一方、「見る・視る」は、注視して見ることで、watchである。そして「見立てる」には、「なぞらえる、みなす」「あるモノに似た特徴を別のものに見出して、それになぞらえて表現する」「見て、いい・悪いの判断をする」という意味がある。このワークショップでは、まず大原八幡宮の米占いの概要を知り、そこに出現したカビを観察する。そして米占いにおける「見立て」とは何かを想像し、「見立て」で遊んでみる。出現したカビの観察の疑似体験を行うワークショップだ。

大原八幡宮の米占いとは

米占いでは、炊いた赤飯を2つのお盆に盛り付け、片方のお盆(五穀盆)には経木で仕切りを入れる。もう一方(地形盆)には川名を書いた経木を立て、葛カズラ(クスのほふく茎)を割いたものを川に見立てて設置する。これを神殿に1か月間供え、生えてくるカビから、氏子はその年の米や麦などの作柄および天候を占う。



カビの採集と培養

1か月後、お米全体が白いカビで覆われ、部分的に赤や黒、青のカビが発生していた。氏子の占いによると、五穀盆は収穫に問題なしとの予想。地形盆は大山・津江方面に災害の注意が必要との見立てとなった。細矢氏は神主様をお願いして、これらのカビを採集・分離し、国立科学博物館で純粋培養した。そこで目立ったのが、ペスタロチオプシス(Pestalotiopsis)とペニシリウム(Penicillium)という属のカビだった。



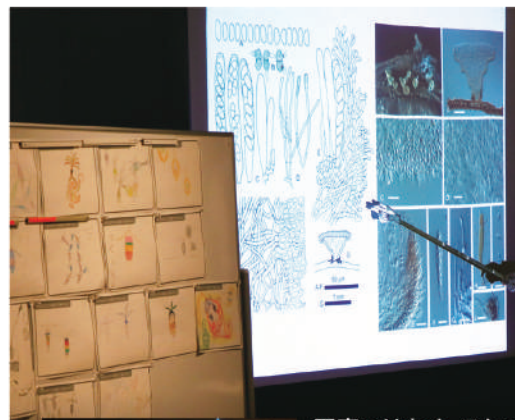
地形盆を何かに見立ててみよう

1か月後の地形盆の様子を何かに見立てて、遊んでみる。経木を山に見立て全体を地形図にする、タコの足に見立てるなど、発想力豊かに描かれた。



ペスタロチオプシスを見立てて遊んでみよう

ペスタロチオプシスは5細胞からなる紡錘形(ぼうすいけい)の胞子で、真ん中の3つの細胞が黒〜褐色。上部の透明細胞からは3本の付属枝が出ており、下部の透明細胞は棘状にとがっている。この属のカビはいずれもこのような特徴を持っているという。この特徴的な形を何かに見立てて遊んでみた。



科学的な観察とスケッチ

科学的な観察とスケッチをする基本は、線だけで描くことだ。その際、陰影はつけない。もし色をつける場合は点の密度の濃淡で表現する。そして大きく描くことが大切。それは細部まで正確に描くためである。より多くの観察をして、典型的な姿を描くことになる。

光学顕微鏡で観察をするとき、被写界深度は大切な概念である。ピントを合わせた部分の前後の、ピントが合っていないように見える範囲を被写界深度という。倍率が高くなると浅くなり、絞ると深くなる。立体的なものを光学顕微鏡で観察すると、被写界深度が浅いため、断面としての画像が得られる。

写真ではなく、スケッチ

観察のときには、写真を撮るよりスケッチがおすすめという細矢氏。なぜかというと、

① スケッチをしようとする、細部まで観察をしなくてはならない。ただ漠然と「見えている」ことから積極的に「見ようとする」ことによって、詳細な情報を得ることができる。

② 写真では、被写界深度の問題でピントの合わない部分が出てしまう。また本来、意味がない像も入り込む。

詳細な観察によって隅々までピントを合わせ、余計な像を排除した明確なスケッチを描くことで、他者に伝わりやすくなる。見えるものをそのまま伝えるのであれば写真の方が優れているが、スケッチは、いくつもの標本の中から典型的な特徴や共通する特徴を見つけ出し、それが伝わるように描くものである。



ペスタロチオプシス胞子を疑似スケッチしてみよう

ペスタロチオプシスの胞子を正確にスケッチすることにチャレンジ。ピントが合っている部分に注目し、複数の画像をまとめて1つのスケッチにする。



ペニシリウムを観察してみよう

異なるペニシリウムの写真を撮影した画像がある。ピントが合っている部分に注目して、複数の画像をまとめて1つのスケッチにしてみた。

参加者はみんな、見立てと観察により、視点が広がった。



細矢剛

1969年生まれ。大学卒業後、製薬会社の研究員を経て、2004年より国立科学博物館に勤務。専門は菌類(きのこ・カビ・酵母)の分類や進化生態に関する研究。動物でも植物でもない菌類の世界と、人間とのつながりをもっと知ってもらいたいと、展示や講演会などで、幅広く菌類の重要性をアピールしている。現在、国立科学博物館植物研究部長兼筑波実験植物園長、日本菌学会会長、OPAMでは「未知っち見ちっちOver! 科学者と表現者(2020年1月)」「What's Museum」お米とカビを撮る(2021年9月)に登場。



其三

銅鐸 その祈りと造形

講師：井上洋一（考古学）

弥生時代にたくさん作られた釣鐘形の青銅器「銅鐸」。いったい誰が、どんな目的で作ったのか。さまざまな形、色、大きさ、そして模様・文様がある。形状や文様をもとに想像が想像を呼び、見立てることで研究されてきた。楽器なのか、祭器なのか、諸説ある中で、その用途を歴史や文化とともに聞いた。

井上館長のイチオシ!

井上洋一氏は、東京国立博物館、九州国立博物館、奈良国立博物館と、3つの国立博物館を渡り歩いて仕事をしてきた。初めに、作品の点数について、所蔵作品の決め方など、博物館のことを何でも聞いてみた。「井上館長のイチオシの所蔵品はなんですか?」という質問にも、丁寧に答える井上氏。東京国立博物館には12万件の所蔵品があり、イチオシは、もちろん銅鐸。奈良国立博物館は5千件で9割が仏教美術だが、仏教美術以前の日本の美術も大切と、土偶オシだ。

初めに見たものを、何に見立てるか?

一枚の画像が参加者に手渡される。初めに見たものを、なんだと思うか、何に見立てるか、調査・研究の第一歩だ。画像の上下はどちらだろう。向きによって見立て方は全く変わる。各自、想像力を働かせ、直感で答えた。胸飾り、柵、枕、鍵、建物の装飾、頭を飾るものなどの意見が出たが、実は馬具(鞍金具)。何かわからないモノを、想像をたくましくしてみる、多くの発掘事例を踏まえて推測することが大切だ。

では模様は何に見えるか。唐草、葛をはじめとした植物が多いが、蛇、雲などの意見も出る。答えは竜だった。一度、竜に見える、いろいろな竜が見えてくる。モノの見方がわかってくると、今まで気づかなかったものが見えてくるということだ。

発見が大切

「モノを見立てる発見」「面白さの発見」「楽しさの発見」という、発見が大切、と井上氏。そしてさまざまなモノを見る・比較することを繰り返し、それらを集めると物語が生まれ、展覧会になる。魅力のある展覧会にするためには、企画者本人が楽しむことが一番大切と熱く語る。それはゆくゆく人間の理解につながり、国の文化や歴史を共有することになる。入館者数95万人を記録した東京国立博物館の阿修羅展や、レオナルド・ダ・ヴィンチ《受胎告知》の展示について、その広報や展覧会の工夫、そしてここでしか話せない裏話を聞いた。

重要文化財 装束銅鐸(滋賀県野洲市大岩山出土) 東京国立博物館所蔵 写真: ColBase



使い方を描いてみよう

銅鐸はどのように使われていたのか。銅鐸の使い方を想像して描いてみた。「未知っち、見ちっち」は連続講座のため、顔見知りになった参加者も多い。「私が見立てては…」と「鐸というからには鳴らすものでしょ…」とおしゃべりも弾み、いろいろな使い方が描かれた。



銅鐸とは何なのか

どの銅鐸も、安住寺の釣鐘(大分県杵築市・県内最古)、富貴寺(大分県豊後高田市)の半鐘、法隆寺の風鐸などに似ているという。銅鐸は銅・錫・鉛の合金で作られた青銅器で、色は黄金色。しかし通常、見られる銅鐸は錆びているため、本来とは異なるイメージになりやすい。また日本最古の銅鐸は20cmくらいと小さく、最大のは135cmもあるという。小さいものから大きいものへと変化したのは、呪力をパワーアップするためのものかも知れない。



銅鐸は埋納されていたため、祭器だったのではと言われている。舌(ゼツ)が内部に吊るされ、当たって音が鳴る仕組みだ。舌の当たった部分は摩耗している。舌の発見されない銅鐸も、内部に同じような摩耗がみられる場合は、それが鳴らされていた証拠となる。近年、淡路島で発見された銅鐸には、紐付きの舌が入っていた。



寿司屋の銅鐸

狩野晴川院養信による《戸山荘地取図》(東京国立博物館)は尾張徳川藩の屋敷の庭を描いているが、そこに銅鐸が描かれている。よく見ると下が欠けているようだ。ところで井上氏が大学院生の時、東京の寿司屋のショーウィンドウに、下部の欠けた銅鐸が飾られているのを見つけた。時を経て東京国立博物館に勤めていた時、古美術商が下部の欠けた銅鐸を持ってくる。その時は購入できなかったが、海外流出を懸念して文化庁が購入。今は九州国立博物館にある。井上氏は「この銅鐸は養信が描いた銅鐸と同じものである可能性が高いとらんでいる」と思い入れたっぶりだ。

※右2点の写真は井上洋一氏提供



戸山荘地取図(部分) 東京国立博物館所蔵



近畿式銅鐸(出土地不詳) 九州国立博物館所蔵

銅鐸の謎

銅鐸は実際に何のために埋めたのか、わかっていない。多くの研究者が、江戸時代からこの謎に挑戦してきているという。祭り使ったあと捨てた。宝としての銅鐸を隠した(隠匿)。聖域の象徴として土の中で保管した。平時は集落で管理しているものを有事に埋納。地鎮の結界とした、等々の説がある。

広く世界に目を向けると参考になることがある。クレタ島には斧、剣、矛を埋めた洞窟がある。その斧は巨大で、普通に使うサイズではない。パワーを増幅して埋納されている。中国では編鐘という、複数の鐘を吊るした古代中国の楽器があり、権力者の墓に副葬されていた。銅鐸にも複数で埋納されたものがあるが、それらは時期が異なるものを集めて埋納されたもので、編鐘とは異なるが、観察と比較、そして推測が必要だ。

銅鐸は、輝く鐘として、弥生時代の最強の祭器で戦いのシンボルだったかも知れない。というのは、弥生時代はお米を作り、ムラが発展したという牧歌的イメージがあるが、戦いの時代だということがわかってきた。弥生時代が終わり古墳時代になると、銅鐸はなくなる。周りが平和になると銅鐸は要らなくなって、埋められたのかも知れない。今までの定説をそのまま受け入れるのではなく、考え直した方がよい。

銅鐸は飛鳥時代にはすでに人々の記憶から消し去られ、その用途・性格は不明のまま。これまでの研究で銅鐸の型式・分布はわかるが、そもそも何なのか。音を出すことはわかったが、その意味はわからない。農耕祭祀に関連しているとするれば、古墳時代になかったのはなぜか。戦いと結びつく、権力者のシンボルだったのではないか。銅鐸の絵画は身近な生活そのものを表現したと考えられる。その中にも祈りがある。有力な説の一つとして、銅鐸は共同体のシンボルであり、その集合はムラムラの統合を意味するという考えがある。果たしてそうか。「みなさんも謎解きに挑戦してみてください」と、ワークショップ・レクチャーは終了した。見立てる想像と発見の楽しさを満喫した参加者だった。



井上洋一

1956年、神奈川県相模原市生まれ。国学院大学大学院文学研究科 日本史学専攻 博士課程後期単位を取得。1985年、東京国立博物館(東博)に入り、東博の学芸部考古学部長や事業部教育普及課長、九州国立博物館学芸部長、東博学芸企画部長などを歴任。東博副館長を経て、2021年4月、奈良国立博物館館長に就任。日本考古学が専門で、日本の青銅器文化の研究などを行っている。日本ユネスコ国内委員会委員、ICOM日本委員会理事として、文化財保護や博物館活動にも尽力している。またOPAMでは特別顧問として館を支える。2019年7月〜2021年3月。

其の四

茶室とその精神

茶室建築は茶の湯の思想の表れ

茶室は茶の湯のためにつくられたもので、茶室を知ると茶の湯の精神がわかるという遠山氏。茶室に入る前には、露地という庭を通ることで、俗世から離れ、心身を整えていく。茶室の中では茶を飲む過程で、炭をつぎ、懐石や菓子を食べる茶事が行われる。と、茶事の構成と茶室・露地の関係を明確にし、茶室とは何かということから述べた。

日本建築史の中で茶室をみたときの重要な観点は「身分」である。古来より日本の社会では身分の差は明確であり、建築空間にも色濃く表れていた。畳・板間・縁側・外部、というように、人によって座ることのできる場やその高さなどが明確に差別化されていたのであった。

しかしながら、茶室が成立する際には、身分の差の象徴でもあった縁側、板間と畳の差、上段(室内の貴人の座が他の床よりも高くなっている部分)など、座るところの床の高さの差がなくなり、欄口(にじりぐち)ができ、亭主も客も同じ高さの畳の上で座るようになる。さらに、それ以前では茶を喫する人と点てる人が別室であったが、茶室が成立すると客の前で点前を行う空間が成立するのである。これらの変化は当時の建築空間と身分制度の関係を考えると根底を覆すような出来事であったが、そこには茶の湯の精神が詰まっていたのであった。



講師：遠山典男（茶室建築）

茶室には茶の湯の精神がたくさん込められている。茶室の歴史・意匠・材料・構法に焦点を当て、その特徴をとらえることで、そこにはどのような精神性が込められているか、茶の湯空間における見立てとは何なのかを遠山典男氏に聞いた。



茶室建築で実際に用いられる材や、茶道具などに触れながら、茶室空間について考えた。

触ってみよう、茶室の材と道具



〈茶室で用いられる茶道具〉

侘茶のための茶室が成立する以前の茶会では、左右対称の、均整のとれた天目型の唐物の茶碗に重さが置かれていたが、唐物は貴重で数も限られ、入手することがとても困難であるため、生活雑器の高麗物の器が茶碗と見立てられ、茶会で用いられるようになる。その後には和物の楽茶碗が創作される。

唐物、高麗物、和物という物の変遷を辿るとともに、形や素材の質感も変化があることを、参加者が実際に道具を手に取り体感した。



〈茶室で用いられる材〉

茶室建築で用いられる材は、土、木、竹、木、紙、漆などであり、茶道具で用いられるものと同様である。茶室建築ではどのような材がどのように使われているかということ、材の性質や特徴、構法に焦点を当て、その美意識の根底にあるものを考えた。

茶室の材木や土壁には凹凸や景色をみせる特有の表現がある。室内は暗いため、茶室に入った際には気付かないが、時間の経過とともに暗さに目が慣れ、細部が段階的にみえてくる。時間が意匠化されたともいえる表現である。



京都・妙喜庵の国宝「待庵」は、千利休が手掛けたと伝えられる茶室である。土壁に囲まれた閉鎖的な内部空間であるが、光の必要なところに、必要な光が届くように計画されている。さらに、隅を土壁で塗り回した床の間は、奥行が出ることにより、圧迫感を感じさせないなど、細部にまで茶室建築の美学が行き届いていることを、模型をみながら想像した。



茶室をみる

茶の湯において「見立て」は、必要な物が不足しているなかで、他のものを代用品として用いたり、日常生活で使われている物に美しさや面白さを感じ、茶室の中で用いたりするなど、創意工夫の中で行われてきた。

さらに、「見立て」の概念は決して物だけではなく、言葉にも宿るものであった。言葉も文字で意味を感じるのと、音で感じるのでは、共通するものが異なる。身の回りには言葉の音で「見立て」が応用されている例もたくさんある。

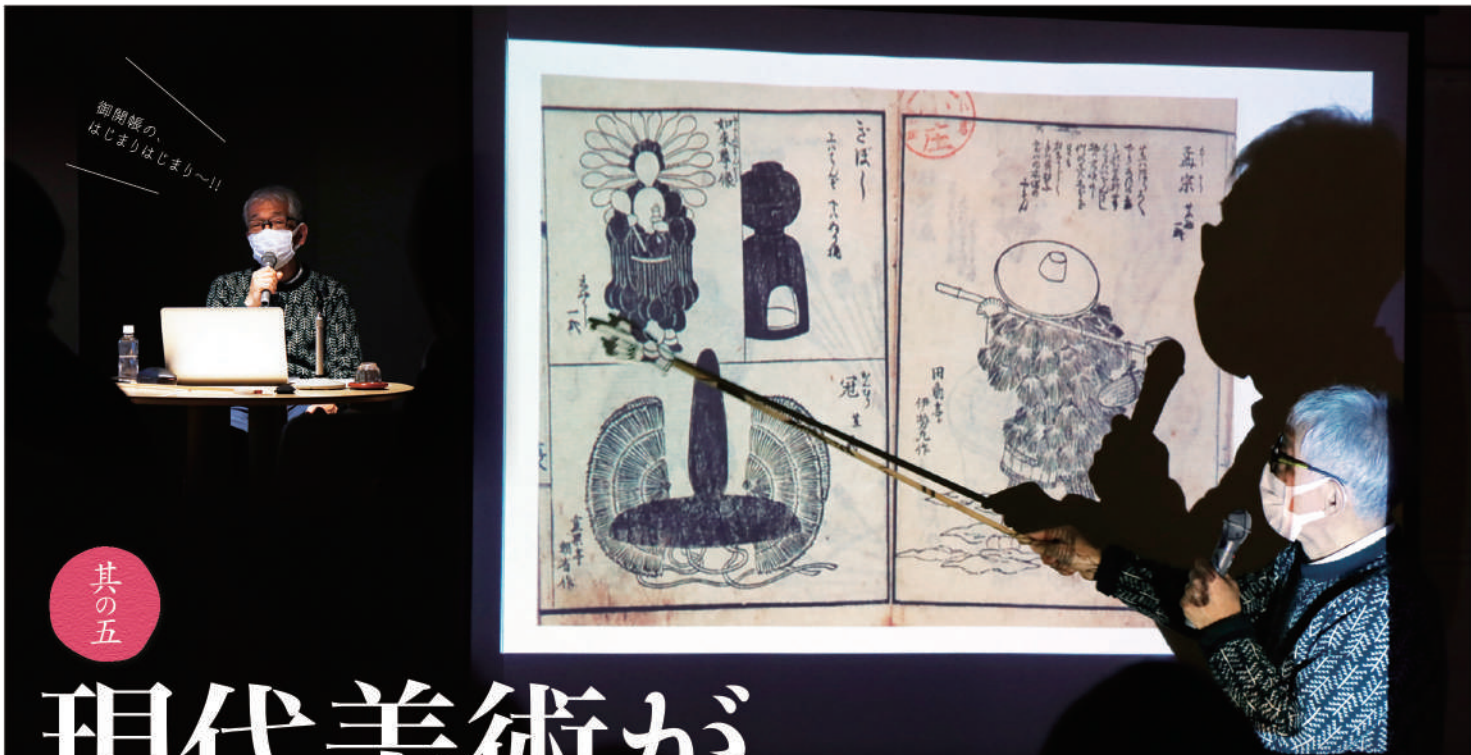
茶室の中で行われてきた「見立て」に着目すると、物の見方や、事の捉え方が精神的に豊かになる。現代社会では物質的な豊かさや、経済的な豊かさによって価値があるとされてきたが、本当にその二つが人間を豊かにするかはわからない。

茶の湯の精神がたくさん詰まった茶室の中では、現代生活を豊かに生きる手掛かりがみつかるかもしれない。



遠山典男

建築史家、茶室建築を専門に設計・施工、修理工事などに従事。また茶室建築からみた日本建築史を研究することで、その背景にある日本人の精神性や美意識、宗教性、生活文化などを探る。裏千家今日庵宮崎担当を経て、現在、数寄屋建築茶美会さびえに所属。東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻博士後期課程在籍。一級建築士。



其の五

現代美術が 細工見世物、 美術展が 開帳だったころの話

講師：木下直之 (博物学・美術史)

江戸時代末期から明治時代にかけて流行った見世物・開帳・書画会は、博物館・美術館のルーツではないか。それは庶民に身近な公開展示の場だったからだ。見る楽しみを触発した文化資源としての見立ての世界と、それが現代の美術館につながる話を木下直之氏に聞いた。

御開帳という文化

江戸両国橋の東側には、諸宗山無縁寺回向院がある。そこで御開帳(自分たちの寺社で普段見せていないものを不特定多数の人に見せる)が行われ、めったに拝めない秘仏・秘宝などを求め、多くの人が参拝した。その参拝者たちが両国橋の西側にも訪れ、見世物小屋や茶屋で栄えた。

飛んだ霊宝で、人を集める

1777年3月、浅草寺の御開帳に合わせて行われた見世物「飛んだ霊宝」。「飛んだ」とは「とんでもない」モノであり、そのチラシに描かれている三尊仏は、すべて干物でできていた。見立てはお茶の世界にあるが、もっと通俗的、庶民的なものとして、身の回りのモノで別のモノを作る見立て細工や見世物小屋があった。

見立て細工の流行

貝細工をはじめ、見立て細工が流行ったのは、材料を見るときにだんだんわかってきたからだ。杓子一式で作る杓子如来を薬師如来とかけるダジャレの世界でもあった。別府市の浜臨温泉で行われる浜臨薬師祭りでは、見立て細工が展示される。江戸時代、こんな材料でこんなものを作ったらい、というものを集めた絵入本「四季造物趣向種」がまだ使われていた。数年前に見た点滴道具一式のバッタは絶品。見立て細工は、1820年代がピークになり、その後、100年くらい続くが、現物はほとんど残っていない。

リアルな生人形(いきにんぎょう)

人形師・松本喜三郎は、見立てを拒否し、リアルな人形を売りにする生人形を作った。本物そっくり、ということが新しい驚きであり、見立てが造形表現から消えていきかけとなった。しかし生人形の遊女は性的な表現が引っかけ、江戸幕府より撤去を命じられた。笑い、時事的なこと、そして性的な表現が展示しづらいのは、現代の美術館でもなお起こる問題である。

生人形はどのくらいのリアリティがあったのか。熊本市現代美術館にある安本亀八《相撲生人形》は、まるで生きているかのような迫力がある。生人形は傷んで、壊れ、捨てられたが、この生人形が残ったのは、外国人が彫刻芸術として母国に持ち帰っていたからだ。それを熊本市が購入して、現在に至る。

彫刻は笑っちゃダメ

明治になると、彫刻家はブロンズでヌード・裸体像を作りはじめた。イメージ・姿は写実的で、生人形と繋がっている。しかしリアルを追及しているのに、キリスト教の世界から出た要請のため、彫刻の股間にくっつくはずがない葉っぱをくっつける。裸婦像には戦後の美術に対する期待が託された。朝倉文夫《花の影》が大分市役所の中にあるのは極端だが、女性の裸が町にあふれていても、それを笑えない。なぜなら神聖な芸術作品だからだ。細工物は、材料がわかり、作ったイメージとの落差を楽しみギャップを笑うものだった。美術の世界から笑いがなくなった。

大阪の瀬戸物祭りでは瀬戸物一式で作られた細工物を楽しんできた。瀬戸物と人間というギャップを楽しみ、毎年作られていた。しかし近年はずっと同じ人形が飾られ、普段はショーケースの中に入っている。江戸時代の見世物小屋は仮の小屋だったが、これは常設で、美術館で作品を見るのと同じ。見世物小屋が美術館に繋がっている。

人間像を作り、それを公開していくのは、見世物の生人形も美術館の彫刻も同じだ。風景彫刻もあり得るはずなのに、人間を作り、裸体表現に向かった。朝倉文夫《山から来た男》はなぜ、現代人ではないのか。見立てである作り物の世界からは離れたものの、どんな人間像をつくるべきか、まだ試行錯誤の段階であった。

御開帳から美術館へ

1842年、法隆寺の出開帳(寺社が建物の維持のため、他の寺社で御開帳を行ってお金を集めた)が回向院で行われた。その時、神仏分離・廃仏毀釈により、かなりのものが皇室に献納(1878)され



江戸島名物の貝細工 (撮影：土田ヒロミ)

(法隆寺献納宝物)、これが東京国立博物館の法隆寺宝物館へつながっている。

絵馬堂と美術館

絵馬堂に飾る絵馬は、雨ざらしのため、何が描かれているか見えなくなってしまったものもある。絵馬堂は神仏に捧げる場所だから、何も行事がなくても、いつも絵馬を飾っている。一方、美術館では、雨ざらしを許さない。美術館は作者の才能に触れる場所だからだ。ところが静岡県立美術館では、最近開催した鴻池朋子展で、作品を雨ざらしにした。変化を単純に劣化ととらえてよいだろうか。見立ては段々と忘れられ、作品を後世に残していくことが使命の美術館になった。しかし、美術館はそれ以外のことを考える場所でもあり続けるだろう。

Profile



木下直之

1954年、静岡県浜松市生まれ。美術史研究者。専門は博物館学、美術史、写真史、見世物研究。東京藝術大学大学院中退、兵庫県立近代美術館学芸員、東京大学総合研究博物館助教授、東京大学大学院人文社会系研究科教授を経て、現在は東京大学名誉教授(文化資源学)、静岡県立美術館館長、神奈川県立歴史民俗学教授、近代日本美術を中心に、写真、建築、記念碑、銅像、祭礼、見世物など社会や国家にかかわる表現、物質文化全般について幅広く研究を行う。忘れられたもの、消えゆくものなどを通して日本の近代について考えてきた。2015年春の紫綬褒章、2017年中日文化賞、著書『美術と見世物』(油絵茶屋の時代)平凡社、1993年、サントリー学芸賞、『ハリボテの町』(朝日新聞社、1996年)、他多数。OPAMでは連続講座「美術館をめぐる7つのお話」(2020年1月)に登壇。



What's Museum? III

糸・布・衣

身近なモノ・歴史的なモノを美術的視点で見る「What's Museum?」の第3弾。今回は繊維に注目し、糸・布・衣を取り上げた。天然繊維から糸を作る、糸から布を作る、そしてできあがった布をまとうという生活と文化について、美術的・多角的な視点で迫る。

まずは教材ボックスの中から天然繊維、そして講座で紹介している道具を、情報コーナーとアトリエ前で紹介した。体験学習室では、前半には日田市の祇園祭から山鉾の背後に飾られる見送幕の画像をメインに展示。後半は大分県立歴史博物館から大分県内の仏像の画像を提供していただき、ロール紙にプリントして展示した。今回の展示はワークショップ「ぬりぬりのぬり絵」の作品も併せて展示する(p. 31)。会期中、少しずつ変化するインスタレーションとなった。



祇園祭のタペストリー

講師：吉田雅子（染織史/京都市立芸術大学 教授）

京都祇園祭は9世紀から始まった祭りで、重要有形民俗文化財の山鉾は、さまざまな美術工芸品で装飾され、まさに動く美術館。その山鉾を飾る外国製の染織品・掛布や、日田祇園祭の見送幕について、制作地や目的、描かれたモチーフや技法とともに、当時の国際交流などの話を聞いた。

祇園祭の山鉾を飾る掛布は、どこから来たのか？

京都祇園祭はどんなお祭りか、どんな山鉾が巡業するのかを見た。山鉾を飾る掛布は、もともとはタペストリーで、16世紀にブリュッセル（ベルギー）で作られた。オランダ東インド会社が関与して、海のシルクロードを渡り、京都の商人によって一枚物がバラバラにされ、日本の各地に分散されたらしい。

海のシルクロードをたどる

海のシルクロードを渡ってきたタペストリーの海路を、世界地図と地球儀で確認する。今は異なる国名・地名を探すため、パソコンのタブレットで検索しながら確かめつつ、海路に色テープを貼っていく。当時、外国製のタペストリーは貴重なもの。日本の平戸に着いてからは、さらに京都でカット・再構成され、大津、長浜、加賀、そして江戸へと売られていく。そのうち京都に残ったいくつかの部分が祇園祭の掛布だった。

江戸時代は鎖国でないかも？

ペルシャ絨毯や、ムガル帝国、中国やその周辺からの染織品についても詳しく見ていく。どうやって広がったかは、いまだ解明されていない部分も多いが、中国のさらに北方、黒龍江から北海道のアイヌ民族との交易を経て松前藩へと、ルートがあった。当時、日本は鎖国状態。そこで松前藩は、アイヌ民族を海外との窓口にして、海外のものを日本に入れていた。

虎の見送幕

日田祇園祭は、大分県日田市で夏に行われる厄除け神事。300年以上の歴史を持ち、疫病や風水害などの災いを払い、安泰を願う祭りである。京都祇園の影響を強く受けたとされる山鉾の背には、鳳凰、獅子、龍、麒麟、玄武などが描かれた見送幕が飾られる。その一つ、日田市隈地区・上横町（現・大和町）の見送幕「岩に虎」は、明治25年に制作され、平成20年に新しいものに作り替えられている。原図は幕末の絵師、祖仙。日田祇園山鉾会館に展示されている。こうした見送幕はどうやって作られたのか。解体修復の際、細部には、ポロポロの金糸を取り除いた綿に、糸を使った凹凸の跡までが残っていた。

400年以上前に海外から伝わってきたタペストリーが京都祇園祭に残り、祇園祭が日田市にも伝わっている。重要無形民俗文化財である「京都祇園祭の山鉾行事」と「日田祇園の曳山行事」は、これからも後世に伝えていきたい。今度の夏は日田を訪れようと思う参加者は多かった。

16～17世紀は海の交通網が発達しており、長崎、対馬、琉球、松前という4つの交易ルートがあった。海外との交易は盛んに行われており、その断片が日本の祇園祭の掛布に表れている。江戸時代、鎖国が行われていたという説も、これから変わるかも知れない。

Profile



吉田雅子
1961年生まれ。人間・環境学博士。専門は染織工芸史。武蔵野美術大学にてテキスタイル染織のデザインを学び、デザイナーとして勤務した後、ワシントンD.C.のテキスタイル美術館でスペシャリスト・イン・ターニングとして染織品の保存・調査に関わる。その後、ニューヨークのメトロポリタン美術館で東アジア染織品のリサーチアシスタントとして勤務。2002年、京都大学大学院人間・環境学研究所修士課程修了。現在、京都市立芸術大学教授。染織技法、美術様式、史料を分析・染織品がたどった東西交渉史を研究し、著書『海のシルクロード』では16世紀半ばから17世紀半ばに日本に舶載された染織品からそれらの制作地・制作年代・制作目的の交易経路等を推定し、意匠の国際交流やその背後にある様々な文化圏の人々の営みを描き出す。





あらためて、六郷満山とは

国東半島には、放射線状に伸びた谷に沿って6つの郷(安岐・武蔵・国東・伊美・田染・糸織)があり、一帯は山岳修行の場であった。六郷満山とは、そこにある寺院と行場の総称である。この地には、養老2年(718年)、八幡神(宇佐神宮)の化身といわれる伝説の僧、仁聞菩薩が開いたと伝えられる天台宗のお寺が数多くある。天台宗と古来の山岳信仰、そして八幡信仰が結びつき、神仏習合の山岳仏教文化が生まれ、独自の六郷満山文化が開花した。

瀬戸内海に面した国東半島は、航路を通じて、近畿地方の都からの文化・情報が入りやすい場所だった。古代寺院の伽藍配置(建物の配置)や瓦にその影響が見られ、平安時代には天台宗も入ってきた。

多様な造形

国東の平安仏には螺髪が大粒であるといった特徴がある。如来立像(萬徳寺)も螺髪が大粒でその特徴を伝えるが、一方で頭部全体は三角に尖ったような形状をしている。これは京都や滋賀の天台系如来像に見られる特徴で、国東の仏師が都近辺の様式を取り入れたといわれている。真木大堂は、大型の優れた仏像が複数安置されることで有名だが、そのなかの不動明王像は、平安時代の代表的な仏像様式を確立した定朝周辺の仏師によるものともいわれており、このことから近畿と国東の盛んな交流がうかがえる。

そのほかにも国東半島には特徴的な造形が伝わる。八幡三神像(八幡奈多宮)は、神像であるが仏像の表現を援用しており、六郷満山の特徴である神仏習合を象徴する造形といえる。また、太郎天像(長安寺)は、みずらをつけた童子の姿で神像を思わせるが、胎内に墨書があり、不動明王の化身であることがわかる。



大分の仏像・六郷満山を中心に

講師:菅野剛宏 (大分県歴史博物館 学芸調査課長)

宇佐の八幡信仰と古代仏教が融合した「神仏習合」が今も残る国東半島には、平安から中世にかけて花開いた六郷満山文化の栄華が色濃く残っている。

県内の仏像や仏教行事について、六郷満山を中心に聞いていく中で、都と地方色が混ざった国東の仏像の特徴が印象的に語られた。

大分といえば、磨崖仏

崖に直接彫ったのが磨崖仏。県内88か所にあり、仏様は約400軀。日本一の数を誇る。熊野磨崖仏は凝灰角礫岩(ぎょうかいかくれきがん)に彫られており、キメが粗いため緻密な刻みができない。磨崖仏には木彫仏のように彩色がされたものもあるが、熊野磨崖仏にはその痕跡はない。一方、白杵磨崖仏は、阿蘇の火山灰である溶結凝灰岩に彫られ、柔らかくて彫りやすいため、手足、衣文をはっきり表現し、彩色されているものもある。

国東の伝統行事

修正鬼会は、正月と節分の行事が合体した伝統行事で、今は岩戸寺、成仏寺、天念寺で行われている。登場する鬼は仁聞や仏様の化身とされる。奉入りは、仁間の行跡を追って、僧侶が国東の山々を歩いてめぐる行事。ケベス祭りは六郷満山の行事ではないが、奇怪な面をかぶり、火をめぐる行われる攻防で、最後は火が境内を飛び交う。

これは外せない大分の宝

宇佐市天福寺の木彫による如来立像は、炭素年代測定法で測ると奈良時代までさかのぼる可能性が示された。唐招提寺の木彫と同様に、頭頂から肉髻(につけい)、下部まで一材で造られている。袖の衣文が近畿、頭部などは九州に類似の仏像があり、畿内と九州の表現形式を併せ持っている。そして望像三尊仏は、天平時代盛期の技法で造られ、古代仏教の影響が残っている。中央の仏像は原型をとどめていないが、両脇侍に衣文がしっかり残り、ビーナスのような腰つきが美しい。この仏像をはじめ、大分県立歴史博物館には六郷満山文化に関する展示が充実しているので、ぜひ見てほしいという菅野氏。その笑顔にみんな引き込まれた。



Profile



菅野剛宏

茨城県生まれ。大分県立歴史博物館と大分県立美術館の学芸課長をいったりきたりしながら、うさぎにさきぎの民俗や庶民生活史を中心に、大分県の歴史と文化を県内外に広めている。「神人自然」では、農耕図録馬に見る近代の息吹を記している。現在大分県立歴史博物館学芸調査課長。

衣文からみる仏像彫刻

講師:岩井共二 (奈良国立博物館 学芸部美術室長)

自らを「仏像ハカセ・イワイ」と名乗り、仏像の衣装を着る岩井氏に、仏像の衣文を見ることから、仏像の持つ造形美の魅力について聞いた。

仏像ハカセ・イワイ、登場

螺髪ニットキャップと仏像コスプレ用の布も持参して、アフロヘアに白衣で登場する。「仏像について基礎の基礎から始まり、仏像のディープな見方をするのが、今回の目的です」と岩井氏。「ぶつぞういくつ知ってるかな?」「仏さまってどんな人?」と、質問形式で始まった。

そもそも仏像って何?

仏像には、仏様の化身、具現、権化などの意味がある。遠い世界にいる仏様を、木、金属、石などでかたどったものだった。如来(苦行の末に悟りを開いた釈迦)、菩薩(悟りを求める人)、明王(如来の化身、あるいは使者)、天(インドの神様がお釈迦様に従う)について解説を聞いた。

●仏像の観察ポイント

仏様の顔つき、身体つきとともに、ファッション(着ているもの)によって、如来、菩薩、明王、天が区別される。そして着物の髪(ひだ)がリアルなのか、形式的に表しているのを見ることで、制作年代がわかる。

「如来」はインドのお坊さんの服装をしていて、袈裟を着けている。ファッションスタイルはシンプルで、下は巻きスカート。上半身は一枚の布を身体に巻き付け、着方は偏袒右肩(へんだんうけん/肩を出す)と、通肩(つうけん/両肩をおおう)がある。「菩薩」はスカートの付け方が如来と違い、真ん中をジグザクに持ち上げ、上はエプロンのようにする。天衣(てんね/肩や腕に掛ける細長い布)や条帛(じょうはく/タスキのように掛ける布)をまとう。「不動明王」は菩薩と同じ条帛で、「天」は長い袖の着物に袴と巻きスカート。その上からいるいる甲冑を装着し、かなりの重装備である。

仏像の着付けを実際にやってみることで、仏像の種類の違いや衣の装の造形が見えてくる。まどってみた参加者は、「意外と簡単に暖かい」と面白かった。さらに布の材質や色、下着まで気になり始め、参加者からの質問は止まらない。仏像を衣文から見ることを知って、県内の仏像を視る眼が変わりそうだ。

Profile



岩井共二

1968年愛知県生まれ。名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程中退。1994年から2012年まで山口県立美術館に勤務。2012年より奈良国立博物館に移る。教育室長を経て、学芸部情報サービス室長(彫刻担当)として、公式Twitter運営やテレビ出演など、博物館のPR活動にも積極的に取り組んだ。現在学芸部美術室長。専門は東アジア仏教美術史。仏像の着衣形式のあり方から、東アジアにおける仏像様式の伝播と受容、変容のあり方を探っている。博物館では「仏像コスプレ」のイベントを企画して、仏像の理解に務めている。

ファミリーワークショップ 仏像コスプレ 着付けをしてみる

講師:岩井共二 (奈良国立博物館 学芸部美術室長)

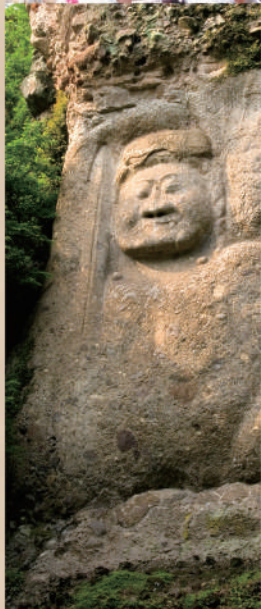
仏像は何を着ていたのかな?「グルグルしている」という言葉が、今日のテーマだ。仏像はもともと、インドの服装サリーと同じグルグル巻きだったから。みんなで布をまとい、如来と菩薩になってみた。

如来は布をグルグルと巻き付けているだけ。偉い人が一番シンプルだった。まずは両肩に布を掛けて(通肩)、まどってみた。そして菩薩になるために巻きスカートを付ける。袈裟を作るのに苦労したが、条帛を巻き、天衣をからめると、全員が菩薩に変身できた。



「What's Museum? III 糸・布・衣」に関して、ぬり絵や繊維をテーマにしたワークショップ・レクチャーを行った。ぬり絵ワークショップは、午前中は未就学児とその保護者が中心、午後は小学生から一般が対象で、日田祇園祭の

「見送幕」と大分県内の仏像の「衣」に注目。できあがった作品は美術館アトリエに展示した(p.27)。また期間中の「朝のおとなの1010講座」「夜のおとなの金曜講座」は、すべて繊維に関する内容で行い、多角的に繊維に迫った。



祇園祭の日

日田祇園祭の見送幕は、緋色のラシャ地に金糸や銀糸の刺繍糸で、龍、虎、鷲、麒麟、唐獅子、鯉などが描かれている。気に入った見送幕に、色鉛筆やクレヨンでぬり絵を行った。



色鉛筆は、丁寧に色を重ねる。混色は同色系(同じような色味)を重ねるか、補色(正反対の色)を重ねるかによって、明るくもなり、落ち着いた感じにもなる。クレヨンはしっかり色がつくので、色鉛筆と併用すると、画面はいろいろな表情になった。



ぬりぬりのぬり絵ワークショップ

サポーター&OPAM美術部員

サポーター活動日にOPAM美術部番外編として、参加できる部員と一緒にぬり絵を行った。集中しての制作に、静かな時が流れる。できあがった絵を体験学習室に展示すると、子どもたちのぬり絵とあわせて華やかな感じになった。



「ぬり絵/仏像・ミニ」アトリエ・ミュージアム みんなでつくろっ!



来館した人は誰でも参加できる「アトリエ・ミュージアム」でも、「ぬり絵/仏像・ミニ」を行った。

オシャレな仏像さんの日

ぬり絵にしたのは、阿彌陀如来像(瑠璃光寺・国東市)、毘沙門天立像(永興寺・日田市)、不動明王坐像と聖徳太子立像(金剛宝戒寺・大分市)、八幡三神像(八幡奈多宮・杵築市)、不動明王立像と阿彌陀如来坐像(真木大堂・豊後高田市)、白杵磨崖仏の8種類。大分県立歴史博物館より画像を提供してもらい、まとめている布の部分に白くした。



使うのは色鉛筆のみ。布に模様をつける一つの方法として、白い色鉛筆で模様を描き、上から色を塗り重ねることで、模様を浮き出させることも紹介した。大人も子どもも集中してカラフルな衣に変身させた。



朝のおとなの1010講座

「糸を紡ごう!」素材と技術

棒の先に重りが付いただけの原始的な紡ぎ車(スピンドル)にチャレンジ。原理はわかるものの、手が慣れるまでには時間がかかりそうだった。そして足踏みによる紡ぎ車の使い方を、しっかり見た。



カード機を使い、羊毛をふわふわにして、繊維の方向を整えてから紡ぐ。混色もできるが、糸になり、布になると色味も変わるので、そこを視野に入れた混色は、経験が必要な作業だ。

「紙の布」素材と技術

一枚の紙が布になる。「紙衣」と「紙布」の違いについて、実物資料を見ながら解説したあと、紙を細長くカットして糸を紡ぐ実演を行った。細長く切れ目を入れた和紙を湿らせ、転がすようにからめる。そして紡ぎ車を使って糸にする。この方法をとれば、均一な太さの糸を紡ぐことができ、経糸・緯糸ともに和紙の糸で織ることができる。



夜のおとなの金曜講座

「繊維いろいろ」素材と技術

代表的な天然繊維は、綿・麻・絹・羊毛。それ以外にも藤や葛、和紙になる楮・三椏・雁皮などがある。さまざまな繊維を紹介した。



「織物組織の、ちょっと難しい話」素材と技術

経糸と緯糸が90°に交わり、線が面になる織物は、平織、綾織、朱子織(しゅうすり)が基本形。繰り返しの最小単位となる完全組織を方眼状に表し、織物の組織とその表し方について解説すると「数学みたい」という声が多く参加者から聞かれた。



「糸・布・衣の物語」美術からみた文化

人はなぜ、衣服を着るようになったのか。羞恥説・防寒説・装飾について、絵画・彫刻に表現された羞恥説主題であるアダムとイブの物語や、ギリシャ彫刻における濡れ衣表現、リアルな表現を追求したルネサンス様式などを見ていく。あわせて石彫とは思えないリアルな布の表現や、写実的な表現に向かう絵画、着物などを紹介した。



「NUNOの布」視るは楽しい教材ボックス

以前の講座では紹介しきれなかった、須藤玲子氏デザインによる布を紹介する。はじめに23種類の布の素材や技術をまとめた教材ボックス・ミニを手にとって、広げたい布を選ぶ。視て触り、素材と技術の融合を感じた。

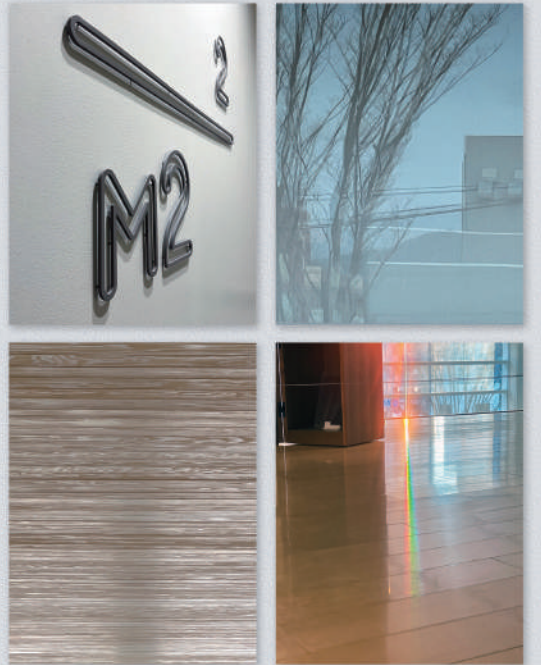


日時:2022年11月25日(金)11:30~12:15(3組 34名)
 ■学校法人いずみヶ丘学園 どんぐり幼稚園5歳児 18名
 [ばたふわ]
 日時:2022年11月28日(月)10:00~12:00
 ■学校法人みのり学園 認定こども園 三隈幼稚園4歳児 19名
 [ころころピンポン]
 日時:2022年11月29日(火)9:30~10:50
 ■大分県立南石垣支援学校4~6年生 8名
 [積み紙スクエア]
 日時:2022年12月1日(木)10:30~12:00
 ■大分県立日田支援学校
 [ころころボール] 中学部2年生 9名
 日時:2022年12月2日(金)9:30~10:15
 [ころころボール] 小学部1~6年生 19名
 日時:2022年12月2日(金)10:30~11:20
 [ころころボール] 中学部1年生 7名
 日時:2022年12月2日(金)11:30~12:20
 [ころころボール] 中学部3年生 2名
 日時:2022年12月2日(金)13:00~14:30
 ■大分県立豊学校中学部 3名
 [静かなるアクションペインティング]
 日時:2022年12月7日(水)10:45~12:20
 ■大分市立金池小学校3年生
 [金池小に住んでいる妖精たち]
 日時:2022年12月14日(水)12:40~13:25(129名)
 日時:2022年12月15日(木)8:40~10:15(1・2組 65名)
 日時:2022年12月15日(木)10:35~12:10(3・4組 65名)
 日時:2022年12月16日(金)8:40~10:15(1・2組 63名)
 日時:2022年12月16日(金)10:35~12:10(3・4組 64名)
 ■国東市立富来小学校5・6年生 31名
 [のそいで、水族館の世界]
 日時:2022年12月19日(月)13:35~15:10
 ■社会福祉法人真玉福祉会 真玉保育園4・5歳児 33名
 [ころころピンポン]
 日時:2022年12月21日(水)9:30~11:00
 ■別府市立内藤保育所4歳児 8名
 [ばたふわ]
 日時:2023年1月11日(水)10:00~11:00
 ■大分市立野津原小学校1年生 17名
 [ばたばたバタフライ]
 日時:2023年1月20日(金)9:30~11:20
 ■杵築市立守江幼稚園5歳児 4名
 [テコデコ・デカルコマナー]
 日時:2023年1月23日(月)10:00~11:30
 ■大分県立豊学校幼稚部 7名
 [ころころボール]
 日時:2023年1月24日(火)10:00~11:30
 ■佐伯市立上堅田幼稚園5歳児 11名
 [葉まみれ]
 日時:2023年1月26日(木)9:30~11:00
 ■別府市立中央保育所4・5歳児 17名
 [今日は積むぞ!]
 日時:2023年2月1日(水)10:00~11:00
 ■社会福祉法人産土会 みずほ保育園4・5歳児 18名
 [積みコップ]
 日時:2023年2月6日(月)9:30~11:30
 ■豊後大野市立緒方中学校
 [ぼわんぼわん] 1年生 19名
 日時:2023年2月10日(金)10:25~11:15
 [たたんで、ひらいて、きって、ボン!] 2年生 13名
 日時:2023年2月10日(金)11:25~12:15
 ■佐伯市立東雲小学校
 [壁画のための画材の話] 6年生 8名
 日時:2023年2月10日(金)9:00~10:40
 講師:佐野藍(彫刻家)
 [視る・触る[Hands on works]] 6年生 8名+佐伯市立上浦幼稚園児 2名
 日時:2023年2月10日(金)10:45~11:50
 講師:佐野藍(彫刻家)
 [ドラゴン・ラビリンス] 1~6年生 25名
 日時:2023年2月10日(金)13:35~14:20
 ■認定こども園 日田ルーテルこども園5歳児 46名
 [マントをつくる]
 日時:2023年2月14日(火)10:00~11:45
 ■佐伯市立東雲小学校6年生 8名
 [壁画のために。表現のために。]

日時:2023年2月22日(水)13:30~14:15
 ■佐伯市立東雲小学校6年生 8名
 [Zoomによる 壁画のために。表現のために。]
 日時:2023年3月3日(金)10:50~11:10
 ■由布市立石城小学校4年生
 [ザ・ピグメント 由布色をつくる]
 日時:2023年3月9日(木)8:50~12:20
 ■学校法人みのり学園 認定こども園 三隈幼稚園5歳児
 講師:妻木良三(美術家、浄土真宗僧侶)
 [風景とそのむこう側]
 日時:2023年3月15日(水)10:00~12:00
 ※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、「出前ワークショップ」11件中止。
地域美術館体験講座
 場所:臼杵市歴史資料館
 [臼杵の美術家や風土]
 日時:2022年10月4日(火)13:50~15:20
 参加者:大分県立美術館ガイドスタッフ(研修) 19名
 日時:2022年10月5日(水)9:30~10:15
 参加者:臼杵市立佐志生小学校1~6年生 18名
 日時:2022年10月5日(水)10:25~11:10
 参加者:大分県立臼杵支援学校小学部3年生、中学部2・3年生 13名
 日時:2022年10月5日(水)11:20~12:05
 参加者:臼杵市立海辺小学校3・4年生 25名
 日時:2022年10月5日(水)13:30~14:15
 参加者:臼杵市立南中学校1年生 10名
 日時:2022年10月6日(木)9:30~10:15
 参加者:臼杵市立臼杵南小学校3~5年生 28名
 日時:2022年10月6日(木)10:25~11:10
 参加者:臼杵市立上北小学校1~6年生 39名
 日時:2022年10月6日(木)11:20~12:05
 参加者:臼杵市立西中学校1年生 27名
 日時:2022年10月6日(木)13:30~14:15
 参加者:臼杵市立下北小学校3年生 32名
 日時:2022年10月6日(木)14:25~15:10
 参加者:臼杵市立福良ヶ丘小学校3年生 14名
 日時:2022年10月7日(金)9:30~10:15
 参加者:臼杵市立川登小学校1~6年生 24名
 日時:2022年10月7日(金)10:25~11:10
 参加者:臼杵市立南野津小学校3・4年生 10名
 日時:2022年10月7日(金)11:20~12:05
 参加者:臼杵市立西中学校1年生 26名
 日時:2022年10月12日(水)9:30~10:15
 参加者:臼杵市立臼杵小学校3年生 21名
 日時:2022年10月12日(水)10:25~11:10
 参加者:臼杵市立臼杵小学校3年生 19名
 日時:2022年10月12日(水)11:20~12:05
 参加者:臼杵市立西中学校1年生 27名
 日時:2022年10月13日(木)9:30~10:15
 参加者:臼杵市立野津小学校3年生 30名
 日時:2022年10月13日(木)10:25~11:10
 参加者:臼杵市立市浜小学校3年生 38名
 日時:2022年10月13日(木)13:30~14:15
 参加者:臼杵市立市浜小学校3年生 36名
 日時:2022年10月13日(木)14:25~15:10
 参加者:臼杵市立下南小学校3年生 21名
 日時:2022年10月14日(金)9:30~10:15
 参加者:臼杵市立下ノ江小学校1~6年生 41名
 日時:2022年10月14日(金)11:20~12:05
 参加者:臼杵市立西中学校1年生 26名
 日時:2022年10月14日(金)13:30~14:15
 参加者:臼杵市立東中学校1年生 20名
 日時:2022年10月14日(金)14:25~15:10
 参加者:臼杵市立東中学校1年生 20名
 日時:2022年10月17日(月)9:30~10:15
 参加者:臼杵市立北中学校1年生 22名
 日時:2022年10月17日(月)10:25~11:10
 参加者:臼杵市立北中学校1年生 25名
 日時:2022年10月17日(月)11:20~12:05
 参加者:臼杵市立北中学校1年生 22名
 日時:2022年10月17日(月)13:30~14:15
 参加者:臼杵市立野津中学校1年生 39名
連携プログラム

ミュージアムを活用した子どもの感性育成事業 (小4ミュージアムツアー)
 場所:OPAM 2F研修室、3Fホワイエ・コレクション展示室
 日時:2022年6月7日(火)10:20~12:00
 参加者:小4ミュージアムツアーガイドスタッフ(研修) 16名
 日時:2022年6月7日(火)14:50~16:30
 参加者:引率教員(研修) 24名
 日時:2022年7月7日(木)10:00~12:00
 参加者:津久見市立聖徳小学校4年生 7名
 日時:2022年7月7日(木)10:00~12:00
 参加者:宇佐市立天津小学校4年生 9名
 日時:2022年7月8日(金)10:00~12:00
 参加者:由布市立扶間小学校4年生 59名
 日時:2022年7月8日(金)13:00~15:00
 参加者:由布市立扶間小学校4年生 30名
 日時:2022年8月30日(火)10:00~12:00
 参加者:佐伯市立明治小学校1・3・5・6年生 15名
 日時:2022年9月1日(木)10:00~12:00
 参加者:杵築市立山香小学校4年生 36名
 日時:2022年9月2日(金)10:00~12:00
 参加者:日出町立豊岡小学校4年生 46名
 日時:2022年9月22日(木)10:00~12:00
 参加者:中津市立和田小学校4年生 29名
 日時:2022年9月29日(木)10:00~12:00
 参加者:宇佐市立宇佐小学校4年生 10名
 日時:2022年10月3日(月)10:00~12:00
 参加者:杵築市立豊洋小学校3・4年生 12名
 日時:2022年10月6日(木)10:00~12:00
 参加者:竹田市立直入小学校4年生 18名
 日時:2022年10月7日(金)10:00~12:00
 参加者:国東市立安岐中央小学校4年生 28名
 日時:2022年10月7日(金)13:00~15:00
 参加者:大分県立野津原小学校4年生 20名
 日時:2022年10月14日(金)10:00~12:00
 参加者:宇佐市立八幡小学校4年生 17名
 日時:2022年10月18日(火)10:00~12:00
 参加者:中津市立今津小学校4・5年生 63名
 日時:2022年10月21日(金)10:00~12:00
 参加者:宇佐市立四日市南小学校4年生 46名
 日時:2022年10月25日(火)10:00~12:00
 参加者:日出町立川崎小学校4年生 61名
 日時:2022年10月27日(木)10:00~12:00
 参加者:中津市立豊田小学校4年生 61名
 日時:2022年10月27日(木)13:00~15:00
 参加者:竹田市立荻小学校4年生 18名
 日時:2022年10月28日(金)10:00~12:00
 参加者:臼杵市立南野津小学校 4・5年生 12名
 日時:2022年10月31日(月)10:00~12:00
 参加者:宇佐市立長峰小学校3・4年生 11名
 日時:2022年11月1日(火)10:00~12:00
 参加者:別府市立鶴見小学校4年生 68名
 日時:2022年11月4日(金)10:00~12:00
 参加者:日田市立若宮小学校4年生 27名
 日時:2022年11月10日(木)10:00~12:00
 参加者:日田市立津江小学校1~6年生 33名
 日時:2023年2月10日(金)10:00~12:00
 参加者:佐伯市立上堅田小学校4年生 45名
先生のためのワークショップ
 [幼稚園新規採用教員研修に係る園外研修]
 場所:OPAM 2Fアトリエ、3Fコレクション展示室
 日時:2022年6月30日(木)10:00~12:15
 参加者:幼稚園新規採用教諭 38名
 [幼稚園中堅教諭等資質向上研修に係る園外研修]
 場所:OPAM 2Fアトリエ、3Fコレクション展示室
 日時:2022年7月22日(金)13:00~16:00
 参加者:幼稚園中堅教諭 18名
 [中堅保育教諭等資質向上研修に係る園外研修]
 場所:OPAM 2Fアトリエ・研修室、3Fコレクション展示室
 日時:2022年8月29日(月)10:00~16:10
 参加者:認定こども園中堅保育教諭 21名
 [新規採用保育教諭研修に係る園外研修]
 場所:OPAM 2Fアトリエ、3Fコレクション展示室
 日時:2022年9月30日(金)10:00~12:15
 参加者:認定こども園新規採用保育教諭 29名
 [テーマ別研修「美術館・埋蔵文化財センター活用研修」]

場所:OPAM 2Fアトリエ
 日時:2022年10月12日(水)10:10~12:30
 参加者:小中学校教諭 13名
 [ステップアップ研修1「教科指導2」]
 場所:OPAM 2Fアトリエ、3Fコレクション展示室
 日時:2022年10月24日(月)10:10~12:30
 参加者:小学校教諭 27名
 日時:2022年10月24日(月)14:00~16:20
 参加者:小学校教諭 27名
 日時:2022年10月25日(火)10:10~12:30
 参加者:小学校教諭 26名
 日時:2022年10月25日(火)14:00~16:20
 参加者:小学校教諭 27名
 [粘土ワークショップ]
 場所:旧玖珠町立北山田幼稚園
 日時:2022年11月7日(月)13:00~15:00
 参加者:玖珠町こども園協議会職員 5名
 [Zoom配信によるワークショップ(第67回大分県造形教育研究大会 大分大会)]
 場所:各幼稚園・保育園
 日時:2022年12月15日(木)15:00~16:00
 参加者:幼稚園・保育園の先生 17名
 [先生のためのワークショップ]
 講師:佐野藍(彫刻家)
 場所:佐伯市立東雲小学校
 日時:2023年2月10日(金)15:45~16:45
 参加者:佐伯市立東雲小学校職員 6名
一般財団法人地域創造 人材育成・研修事業
 [ステージラボ大分セッション 共通プログラム]
 場所:iichiko総合文化センター iichikoアトリウムプラザ
 日時:2022年7月6日(水)17:30~19:30
 参加者:地域の文化・芸術に携わる公共ホール・劇場等並びに地方公共団体の職員 52名
大学と連携したアートマネジメント実践
 [アートマネジメント実践講座]
 場所:大分県立芸術文化短期大学
 日時:2022年11月9日(水)16:20~17:20
 参加者:大分県立芸術文化短期大学1年生 70名
サポーター・教育普及グループ活動
 場所:OPAM 2Fアトリエ
 [カオカオ・ミュージアム制作]
 日時:2022年4月10日(日)14:00~16:00
 参加者:8名
 [らっぷ・らっぷ・すけーぷ制作]
 日時:2022年5月1日(日)14:00~16:00
 参加者:9名
 [ワークショップ企画①]
 日時:2022年6月12日(日)14:00~16:00
 参加者:9名
 [ワークショップ企画②]
 日時:2022年7月17日(日)14:00~16:00
 参加者:9名
 [ワークショップ企画③]
 日時:2022年8月7日(日)14:00~16:00
 参加者:7名
 [活動展示片付け]
 日時:2022年9月10日(土)14:00~16:00
 参加者:6名
 [ワークショップ試作]
 日時:2022年10月23日(日)14:00~16:00
 参加者:4名
 [ワークショップ片付け]
 日時:2022年11月20日(日)14:00~16:00
 参加者:7名
 [活動展示追加・意見交換]
 日時:2022年12月25日(日)14:00~16:00
 参加者:9名
 [ワークショップ準備]
 日時:2023年1月29日(日)14:00~16:00
 参加者:9名
 [ぬりぬりのぬり絵ワークショップ制作]
 日時:2023年2月12日(日)14:00~16:00
 参加者:8名
 [ワークショップ準備]
 日時:2023年3月12日(日)14:00~16:00



びじゅつって、すげえ! 2022-2023
 Vol.2 いろんなところに、美術がいっぱい。

企画・制作・発行
 公益財団法人 大分県芸術文化スポーツ振興財団

事務局
 大分県立美術館 学芸企画課 教育普及室
 大分市寿町2番1号 TEL.097-533-4502

執筆
 榎本寿紀 大分県立美術館 学芸企画課 教育普及室 室長

編集協力:ラルゴ 井上裕子
 デザイン:ティ・エア 佐々木ツヨシ
 印刷:株式会社 明文堂印刷

2023年3月発行
 ※本誌に掲載した記事・写真・イラスト等の無断転載は禁じます。

